2021年9月分総評　杉本真維子

　できるだけたくさんの詩と対話をしたいと思います。

「開かずの踏切で／遮断機が上がるのを／待つ間／思い出す／水族館の暗がり」（まちりこ/埼玉県）
想起されるものはすべて「水族館の暗がり」のような場所を通ってやってくるのかもしれません。そこは暗がりなのになぜかあたたかくて、どこかなつかしい場所のような気がします。

「読みかけの本を窓からやって来た／風が勝手に読んで出ていく」（猫谷圭希/広島県）
見えないもののすがたを捉えるのが巧みな書き手のようです。たとえばこれは「風」。改行によって作り出した間（ま）とリズムが、一ページずつ舐めとるように本を読んでいく風のさまを形作っています。

「目の上を蛇がみっちり這う／温い乳房を裂いて満ちる海水」（うずたろう/埼玉県）
どんな状況かはわかりませんが、たとえば水位が目の高さを超えるあたりまで海水に潜ったとき、あるいは平泳ぎか何かの最中、こういう景色が見えるかもしれません。水の表面張力を揺らす波紋のさまを思わせる、「みっちり這う」「乳房を裂いて」などの表現も巧みです。

「ぐっもーにん、／上から朝がやってくる／さかなは光のテレビを見てる」（折田日々希/神奈川県）
キラキラした光の連なりのイメージが、近未来的な朝を思わせます。なるほど朝とは、一日の最初に出合う、光のかたまりなのですね。

「水になるまでの愉悦に桃がある」（細村星一郎/東京都）
たった一行のなかに、この上なく瑞々しい「桃」があります。

「流れ星夜空の傷はすぐ閉じる」（長谷川柊香/宮城県）
「流れ星」を「傷」と捉えていることは一つの発見だと思います。しかも、この夜空が自らの力で傷を修復してるように見える、というのは、私たちにとって希望以外のなにものでもないでしょう。

「バッタの脚かげに残す記憶」（藤色/京都府）
「バッタの脚かげ」という細部にしずかな驚きがありました。よく気がつきましたね。

「隣にいた人が／隅の座席に移ると／なんだか切ない／他人なのに」（そよ風/東京都）
たまたま隣り合わせただけの関係においても、目を凝らせば、自分の胸にはこんなさみしさがぽつんと灯っているのかもしれません。たいせつにしたい灯りです。

「誰そ彼時／空と電灯の色が／同居する時だ／電信柱が／行進をはじめるのは」（西緑花/京都府）
「電信柱の行進」のイメージは愉快ですが、一方で破壊的なものの力も思わせ、恐ろしくもあります。その振れ幅の大きさが魅力で、この世界をすっぽりと包みこんでしまいそうなほどです。

「剃りたての襟足をただ撫でている／生きているって素晴らしいのね」（猫谷圭希/広島県）
生きるよろこびとは、自分の身体性を素直に感じられることなのかもしれません。

「甘くないコーヒー静かに流し込む／滅ぼしたいものばかりの夏に」（白野/新潟県）
若い苛立ちというスイートなものが端的に表現されているように思います。

「ビル街というオカリナに秋の風」（長谷川柊香/宮城県）
ビル街に秋の風が吹き込み、巨大なオカリナを吹き鳴らしています。その音を聴いてみたい気持ちに駆られます。

「ねむるとき／いちばんしんじて／いるのは　わたし」（翠/東京都）
なるほど。「わたし」という器を信じているからこそ、そこから安心して眠りの世界へと抜け出していけるのですね。不思議と腑に落ちるものを感じました。

今月も力のある新しい書き手が現れました。それでは、来月も投稿をお待ちしています。